方向

第一一七号　一九九〇年七月二〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

中国の詩人と仏教（九）

1990.7.2.　原田憲雄

一一、曹植と『般舟三昧経』（上）

正史の「曹植伝」が口ごもって言わなかったことのなかに梵唄制作があり、「洛神賦」制作のことがあったろう、と、前回のおわりにいいましたが、それをこれからお話します。

曹植には「妾薄命」と題する六言の詩があります。六言の詩とは、一句を六字とし、全体を六字の句ばかりで構成する詩のことです。「妾薄命」の第一首とその拙訳。

攜玉手喜同車　お手をとり同じ車で
比上雲闕飛除　まいります雲の御殿に
釣臺蹇産清虛　釣り場は高く涼しくて
池堤靈沼可娛　池も堤もたのしそう
仰汎龍舟綠波　みどりの波に舟うかべ
俯擢神草枝柯　摘みましょう蓮や河骨
想彼宓妃洛河　洛水（らくすい）の宓妃（ふくひ）みたいね
退詠漢女湘娥　仙女の歌でもうたいましょうか

第二首はこれよりうんと長く、内容も複雑ですが、ここの話は第一首で足りますから、省略します。

さて、六言の詩は、中国の詩のうちでは珍しく、作品も多くありません。六言の句というだけなら、『詩経』小雅・節南山の「雨無正」の第三章に、

謂爾遷于王都　王の都に移れといえば
曰予未有室家　家がまだないといいわけ
鼠思泣血　そっと思えば血の涙
無言不疾　言えばかならず憎まれる
昔爾出居　さきにおまえが出たときは
誰從作爾室　誰がおまえの家を作った

があって、初・二句が六言です。しかし、ごらんのように他の句は六言ではありません。前漢の谷永(?-前九)や後漢の孔融(一五三-二〇八)が六言詩を作ったという伝えはありますが、残っていません。二世紀の中頃に辺韶（へんしょう）字は孝先、という学者がいて、昼寝しているといたずら好きの弟子が、

辺孝先　辺せんせえ
腹便便　腹ポンポン
懶読書　読書に厭きて
但欲眠　ただ昼寝

という歌を作って仲間でうたっていると、聞き付けた先生、

辺為姓　苗字は辺
孝為字　あざなは孝
腹便便　腹ポンポン
五経笥　中には五経
但欲眠　昼寝も俺には
思経事　ベンキョウさ
寐与周公通夢　夢のなかで周公に会い
静与孔子同意　孔子様と共鳴するのだ
師而可嘲　さて、師を嘲ける
出何典記　典故は何かね

とやり返したので、弟子ども大いに恥じた、ということです。師のほうの詩に六言の二句はありますが、他の句が三言と四言ですから、厳密には六言の詩とはいえないでしょう。

この詩と前後して現れるのが本稿（四）で紹介した『般舟三昧経』の偈で、

常信楽於仏法　仏法をつねに信じて
精進行解深慧　修行に励み智慧さとり

広分布為人説　あまねく人のために説き
慎無得食供養　供養を食ることはせず
……　……

で、終始六言ですから、六言の詩に近いといえましょう。もっとも、前に申しましたように漢訳経典の偈は一般に脚韻をふんでおりません。脚韻を踏んだ六言の詩で、現存するものとなると、さきの曹植の詩あたりでしょう。もっとも、曹植の兄曹丕にも六言の詩が三首あります。一つは「寡婦」という作で、

霜露紛兮交下　露と霜　はらはら　かたみに降り
木葉落兮淒淒　木の葉　落ちつくし　さびさび

といった調子ですが、すべての句の第五字目に「兮」の字があって、むしろ「楚辞体」の詩とみるべきです。次は、「魏王が漢の皇帝に代って帝位につくべき天命が下った」という内容の天文官の報告に対する魏王曹丕からの〃辞退〃の文書に見えるもので、

喪乱悠悠過紀　世は乱れ　はるばる　十年
白骨縦横万里　白骨は　万里に　満ち
哀哀下民靡恃　あわれ　民衆に　拠り所もない
吾将佐時整理　わたしは　時代を　整えたのち
復子明辟致仕　君に政治をお返しし　退職しよう

というもので、もう一つ確かでないのを省くと、これだけが曹丕の六言の詩です。かれは兄ではありますが、弟の曹植の作品と、どちらが早いか決めにくく、いずれにしても六言の詩の歴史の草創期にこの兄弟が名を並べているのは注目すべきことです。

ところで、優れた批評家の趙翼（一七二七－一八一四）が、六言詩についてこんなことを言っています。

この文体は、もともと天地自然の音節ではない。だから、巧みな作者がいても、その作品が多くのひとに愛読されるようにならない。（陔余叢考　巻二三）

「天地自然の音節ではない」とは、どういうことでしょうか。それはたぶん、次のようなことなのです。六言の句を、さらに分けると、三言＋三言の組（A）と、二言＋二言＋二言の組（B）になります。曹植の、

攜玉手　共同車

は（A）で、かれの「比上　雲閣　飛除」以下と、曹丕の、

喪乱　悠悠　過紀

などは（B）です。三言をさらに分ければ、一言＋二言（a）、または二言＋一言（b）となります。

攜　玉手

が（a）で、辺韶の、

五経　笥

が（b）です。ここで、（a）＋（b）という組み合わせだと、○　○○、○○　○で、音節の切れ目は動きま

せんが、（b）＋（a）だと○○　○、○　○○・これですと意味の上で障害がなければ○○、○○、○○というふうに、切れ目を移動することができます。

常信楽　於仏法

が、

常信　楽於　仏法

となることができる、といった風にです。

二言はさらに一言＋一言に分けられますが、中国の韻文を考える時にはあまり意味がありません。

さて、実際の作品としての六言詩は、ほとんどが（B）形式の句ばかりでできていて、まれには（A）（B）をまぜたものもありますが、（A）形式の句ばかりで構成したものは、まずありません。なぜかというと（A）ばかり並んだのでは、三言の詩との違いが目立たず、六言としての特異性がはっきりしないからです。では（B）形式の句を並べるとどうかといいますと、二言＋二言を重ねる形式は、中国の文体では散文のリズムを呼び込みやすく、脚韻を踏むなどの細工を加えて、韻文であることを際立たせようとしても、どうしても散文的な感じがのこり、韻文としての「天地自然の音節」を読者に受け取らせにくいのでしょう。あまり長くなくて滑稽な味わいのものなら、散文的なチグハグしたのがかえって面白い、ということにもなりましょう。後世の成功した六言詩がみなそういう趣きのもので、例えば唐代の王維の六言詩、

再見封侯万戸　　二度の目通り　百万石の　大大名

立談賜璧一双　　立ち話しだけで　一双の白玉　ご褒美
詎勝耦耕南畝　　それがいいのか　夫婦で田んぼ耕すより
何如高臥東窓　　どっちだろ　東の窓べでのんびり寝るのと

がすぐれるのは、まさにユーモラスな作品だったからです。

ところで、曹丕や曹植が六言の詩を作るのに、何に学んだのでしょうか。先にあげた『詩経』いらいの六言句をふくむ詩を参考にしたことは勿論でしょうが、わたしは『般舟三昧経』に学んだのだろうと推測するのです。

辺韶の作ったような六言詩に近い先例があれば、すべての句を六言にするくらい何でもないように思われるかも知れませんが、それはコロンブスの卵で、近い一歩を越えるのが大変なのです。ところが、いったん越えられることが分かったら、力のある詩人はすぐ後を追って、最初に越えた人の業績をたちまち乗り越えるたくみな作品を作り上げます。『般舟三昧経』と曹氏兄弟の六言詩についての関りかたがまさにその適例です。

『般舟三昧経』の六言偈は、先に掲げたものを見ればわかるように、

常信楽　於仏法　　常に仏法を信楽し
精進行　解深慧　　行に精進し　深慧を解す

と（A）形式の句を並べたものですが、この二句は、

常信　楽於　仏法　　常に信じて　仏法を楽（ねが）い
精進　行解　深慧　　精進して　深慧を行解す

と（B）形式に受け取れないでもありません。ということは、『般舟三昧経』の六言偈に、六言詩の（A）形式にも（B）形式にも発展しうる可能性が示されていた、ということです。

曹植は、「妾薄命」を作るとき、『般舟三昧経』と同じように（A）形式で六言詩を構成するつもりだったが、三言＋三言では音節がぶつぶつとぎれる。これはだめだと見てとって、第二句から（B）形式にきりかえたところ、すらすらとうまくいった。そこで最後まで（B）形式で進めた。ということだったでしょう。「妾薄命」は六言詩草創時代の詩人の技術上の迷いや、ためらいや、決断が化石となって痕跡をとどめる、貴重な作品というべきです。曹丕のは、散文の手紙のなかにはめ込んだのですから、地の文と調和しない音節を避けるにはどうしても、散文に近いリズムの（B）形式でなければならなかったでしょう。六言詩では、弟の曹植が苦労して敷いたレールに、兄の曹丕がうまく乗って、帝位を手に入れる戦略に使った、と見てよいのではないでしょうか。そうして曹植の実験で示された（B）形式の適合性が、後の六言詩を試みる詩人たちの準則となったのでしょう。

曹丕と曹植はともに、『詩経』以来の四言、当時流行の五言はもとより、珍しい六言・七言の詩の制作に競ったのは、外国の経典の偈の翻訳に、三言・五言・六言・七言があたりまえのように使われているのが励みになったのです。ふたりが何事にも負けずぎらいで、勝るものに常に挑み掛かったことは正史が書き留めています。

中国語は、一つひとつの言葉の音調が固定し、それを組み合わせた文章のリズムやメロディーの調節が、他の国の言葉とずいぶん違います。ですから、インドの音楽に中国の歌詞を合わせるような場合には、中国の詩作に熟練した人でなければ、うまくゆかないでしょう、たとえば曹植のような……。この後は、次回に。

歌人・大塚五朗（八）

1990.7.6. 原田憲雄

前号一〇頁五行、「福井高工書記時代」の短歌「ねもごろに」と、次行「早稲田大学学生時代」の間に、入るべき記事が、抜けていた。次に補っておく。

咲きいでて花のあはさよ庭八つ手夕べの雨の降りて過ぐるを

咲きたけてこぼるる花の白花のやつでに空のあきらけき、冬　〈山原　八八-九〇〉

加賀の山なみ

雨或は霰と日を夜につゞく北陸の初冬は実に陽の光の珍しさ、有難さはたとへるものもない。

たまたまに真陽の照れればゆきづりに遠見さびしき加賀の山なみ　〈「ゆきづり」原文のまま〉

せはしかる朝夕（あさよ）を持てば目觸らうや珍らしと山を今朝は佇（た）ちみつ〈「觸らう」原文のまま〉

はらはらと霰ふり過ぎ庭の樹は寒き日向となりにけるかも

音になけどなく音は寒き雀子の遊びには出ず桐の樹に居る

一羽二羽地に舞ひおりて鳴くからに寂しきものか朝の雀は　〈山原　九一-九三〉

一九二五年　五郎、二十八歳・福井高工書記。

雪原の雨

青の樹の枇杷の花咲く冬浅み雪とならざる雨は降るなり

見ゆるものなにとしもなき雪原の広きにふれば雨のさびしさ

せはしかる朝夕（あさよ）を持てばおのが目に見の静けきは雪原の雨　（山原　九四-九五）

羈旅

大正十四年一月浦和に兄の家を訪ふ。自分にとっては久しぶりの旅であった。

ねむりかねて起きたる人か山駅のプラットホームに降りてあゆめる（軽井沢二首）

荒山のひだに残れる雪あかりそこより生（あ）るる朝のけはひの

豊かなる朝となりゐつ大宮や見上ぐる富士の姿（なり）の尊さ（朝富士三首）

富士が見ゆ富士が見ゆると妻とわれ言葉ひそめて見上げつるかも

おのづから涙ぞくだる天地のかかる眺めは見むと思ひきや

枯葦の水漬き朽ちたる沼岸に泛かびてなけば寂し家鴨は

二三羽の家鴨うかせて銹沼の日暮を近みさゞなみもなし

水鳥の水に泛かべる寂しさや寒き日暮となれる行けの面（井ノ頭二首）

かいつむりくぐり久しく泛かびては即ちみだす水の夕影　（山原　九六-一〇〇）

詞書にいう「兄」とは長兄広通であり、当時、埼玉県浦和市高砂町に住んでいた。この旅行は、福井高工の書記をやめ、中学校教員の資格をとるため、早稲田大学に入学するについての相談が、第一の目的であった。

四月、長兄広通の家に寄宿し、早稲田大学高等師範部に入学、国語・国文を専攻する。

以上を「早稲田大学学生時代」の前に挿入する。

早稲田大学学生時代（二）

一九二五年（つづき）　五郎、二十八歳。早稲田大学学生。特待生となったので、奨学資金が出たが、これは五郎の小遣い程度で、生計は、妻松子の浅草小学校訓導としての給与によった。

たぶんこの年、長兄広通が東京市中野区の阿佐ケ谷駅の近くに家を建てたので、ともに移住する。五郎の通学には近くなったが、松子の勤務地浅草までは約一時間半かかり、不便であった。

九月二十五日、長女喜子（のぶこ）が生れる。松子の通勤が困難になる。広通夫人愛子が親切なひとで、進んで喜子を預かることにしたので、引き続き勤務できることになった。とはいっても、朝はやく起きておむつを洗い、子どもに乳を飲ませて家を出、車中でも授業の準備をした。東京の小学校では研究授業が多いうえ、教員間での競争も激しく、放課後もゆっくりする暇はない。夜遅く帰って子どもに乳房をふくませ、家事のあいまに授業や研究の用意をする日々であった。

一九二六年　五郎、二十九歳。早稲田大学学生。

このころの学友に立野信義があり、後に『山原』の出版を援助する（『山原』巻末手記）。立野氏は、あるいは『続京都風土記』の「心境」の次の記事にいう「友人T」でもあろうか。

その昔、

「いや君には小説が書けるよ。現にこの短い―母と鯛饅頭―なんかなかなか気の利いた、どこかベーソスの

あるいい小品だよ。どうだいこの―山枯れ―の方を二百枚位のものに書き直してみないか。きつといい小説になるよ。」

なんて私を焚きつけた友人のTが、それから十何年もたつたこの間京都にやつて来た。さんざん文学では苦労した男で、私にいはせれば、彼がまともにいけば、石川達二や中川秀義なんかより、だから水野茅平なんかよりずつとずつといい小説の書ける男なんだが、どうして道に迷つたのか、今ちやユーモア小説作家に身を沈めて、

「君、要するに儲けさへすればそれでいいんだよ。文壇なんてものに顔を出してみたつて今更ねえ。」

と、別段残念さうにもしてゐないのである。〈続風土記　一八六―一八七〉

同じ文章によれば、Tは、滋賀県今津の人で、

…といつたやうな小説をW文学に発表したのを読んで、私はすつかり彼が好きになつた。勿論彼は西荻窪に住み、私は阿佐ケ谷に住んでゐてその家が近かつたためでもあり、既にその時彼には妻子があり、私にも亦妻子があつた、そのせいもあつたらう。誠に親しい呑み友達ともなり話友達ともなつたのである。

という。五郎が「物の雑誌に小説を一二度は書いた」〈続風土記　一八五〉のも、早稲田在学中のことであろうか。たぶん、このころ、長兄広通の大阪への転勤にともない、五朗一家は豊島区目白の駅にちかい家に転居する。広通の二女ですでに結婚していた山下四十子（よそこ）の紹介である。ここは四十子の家からも近く、以後、昼間の喜子の世話を四十子がみてくれる。山下四十子氏はいまも健在の由。

この年、十二月二十五日、大正は終わり、「昭和」と改元。

参考までに、この年の社会の出来事を、年表から拾っておこう。

一月、京都帝国大学など全国の社会科学研究会の学生が検挙された。「治安維持法」の最初の適用である。若槻礼次郎内閣成立。二月、林房雄・中野重治らマルクス主義文芸研究会を結成。三月、島木赤彦没。『佐藤春夫詩集』窪田空穂歌集『鏡葉』永井荷風『下谷叢話』。四月、イタリヤでファシスト青年団が組織される。荻原井泉水『新俳句研究』。五月、最初の飛び降り自殺（銀座、松屋デパート）。千葉県姥山貝塚発掘。相馬御風『御風歌集』。六月、東京帝国大学、早稲田大学に学生自由擁護連盟結成。七月、島木赤彦『柿蔭集』岡麓『庭苔』『木下利玄全歌集』。八月、日本放送協会設立。横光利一「春は馬車に乗って」吉川英治「鳴門秘帖」。九月、島崎藤村「嵐」。十月、近衛秀麿、新交響楽団結成。芥川龍之介「点鬼簿」。トロツキー、ソ連共産党政治局から追放。十一月、葉山嘉樹『海に生くる人々』片上伸「批評の時代」。十二月、改造社『現代日本文学全集』、円本時代開始。オーストリヤの詩人、リルケ没。

一九二七年　五郎、三十歳。早稲田大学学生。

大学の学園祭（？）に、木曾節を踊ろう、ということになり、同級生が五郎の家に集まって踊りの練習をする。なかなかうまくなっていたが、直前に、催しが中止された。「何がなんだかさっぱり分からなくて、張りきりやさんたち、がっかり」と、昨日のことのように松子夫人は楽しそうに笑う。諒闇中だったからだろうか。

一九二八年　五郎、三十一歳。早稲田大学学生。

二条駅

1990.7.13.　原田　慶

山陰本線の一部が電化され、嵯峨野線と呼ばれているようである。わたしは滋賀県の母の所へ行くのによく鉄道を利用するが、たいていは市バスで京都駅まで行き、そこから電車に乗るので、嵯峨野線の二条駅前はバスで通り過ぎていた。千本出水という停留所からバスに乗ると三つめの停留所が二条駅前である。ここでバスを降りて、嵯峨野線に乗り、京都駅で東海道線に乗り換えてもいいのだということを、考えたことがなかった。二条駅は山陰へ旅する人や、亀岡などから通勤、通学する人が使う駅のように思っていた。

最近、嵯峨野線が電化され、電車の回数も増えたので、ふと利用してみた主人が、ちょっと旅した気分になるというので、わたしも時々使うようになった。駅の前に「旅、思いついたら二条駅」という看板が出ているが、市中にありながら、妙にひなびた風情を持っている。うすよごれているようでからっと明るく、どこか寂し気で、不思議に、こだわらない陽気さが、親しみを感じさせる。これは京都のもう一つの顔なのだろうか。

待合室には古い大きな木のベンチが向かいあわせに並んでいる。細長い桟を横にべたべたと渡した長椅子で背もたれのふっくらと曲線をもった昔ながらのものである。もとは黒っぽい色だった木に、全体、白いペンキが塗ってある。冬には、それに長い座布団がくくりつけてあって「堅い木の上に座ると骨があたって痛いから、あれはとても具合がいい」と主人は喜んでいる。

切符売り場の反対側に売店があるが、八つ橋、五色豆、もみじまんじゅう、京漬け物など、おきまりのみやげ

品に、おもちゃ、菓子、新聞、週刊誌、新しい感じのするのはテレホンカードくらいのものである。小柄な女の人がいて、せっせと働いているから、辺りにごみや、たばこの吸い殻の山ができていたりすることもない。売店のすぐ近くのすりガラスの中が喫茶店になっていて、ドアの中に人がいる気配がする。むかしは駅の二階が食堂になっていたということであるが、いまでは使われていないようで、暗くなってから駅の前を通ると、二階には灯がついていない。

この駅の建物は背の高い二階建てで、白壁の木造である。二階部分は、ふつうの二階家より高く造られており、細長い木枠の窓がきちんと並んで、白と黒ずんだ木の色の対照が垢抜けた姿を見せている。屋根は城のような形だが棟の反りはなく、両端に鴟尾が跳ねている。二条城に近いので、その中のいずれかの建物を模倣したのかと思っていたが、これは平安神宮にならったものだというから意外である。

山陰本線の京都駅から園部の間は、もと、京都鉄道会社という私鉄だったのを、明治四十一年に国が買い上げたもので、この二条駅は、明治二十二年に建ったのだそうである。そののち山陰線は、兵庫、鳥取、島根を通って、山口の小串から下関市幡生までは長州鉄道線であったのを同じく買収して、幡生で山陽線とむすび、昭和六年に全線開通したのだという。わたしは鳥取までしか行ったことはないが、沿線は日本の山間らしい静かな風景だった。それもずいぶん以前のことだから、今ではどうだろうか。

二条から京都駅までは、途中、丹波口駅を通る二区間だけであるが、線路が高い所を通っているので、町を見下ろすことになり、まったく見知らぬ風景のように眺められる。宅配便の集荷場があって、白い倉庫が続き、見

駆れたおもちゃ箱のような自動車が、ずらっと並んでいるのを見た時には、町中を走りまわっている配達車は、ここから出てくるのだなあと、「おむすびころりん」のネズミの国を思い出した。宝物をいっぱい持っている、ネズミの国である。

帰りに嵯峨野線に乗り換えて二条駅で降り、駅から家まで二十分ほどかかって歩くこともある。その楽しみは、駅の北側に広がる、かつては貨車の引き込み線のあった空き地を見ることである。以前はここにいろいろな型の貨車が止まっていた。赤い鉄枠の上下に、新しい乗用車が次々と積み上げられていることもあった。丹波口に中央市場があるので、そこで荷を下ろした貨車もここに来て止まっていた。材木が運ばれてくることもあった。今では線路が取りはらわれ、駅の奥の方に数条のこっている引き込み線に、石油のタンク車や、青や赤のディーゼル機関車が止まっているくらいのものである。

この広い空き地は、長い間、モデルハウスの展示場になっていて、洋風・和風の新建材の家が十軒余り建って、幟（のぼり）が列をなしていた。昨年の暮れごろ、急にみんな取り除かれて、もとの広場になり、地面のセメントを塗られなかった隙間から、雑草が伸び、風にふらふら揺れているのである。

電車から降りてきて、千本通りに面しているこの広場の前を歩く時は、すぐ傍を自動車がいっぱいに走っていることを忘れている。暮れてきたうす墨の空にわずかに残る夕焼けの色、その下に影のような西の山々、灯の見える家並みが低く感じられる。ここで西に向かっているかぎり、いつか見た古い風景、雑音の消えた物語の世界にいるようである。この広場が、一日でも長くこのままであってほしいと、いつも思う。南側にも広場があり、

材木などの荷揚げ用のプラットホームが、廃墟のようにがらんとして暗く、丈高い雑草に取り囲まれている。セイタカアワダチソウ、イタドリ、ヒメムカシヨモギなど鉄道草とも呼ばれて、荷物に乗って運ばれてきた草たちが、人の背丈ほどにも伸びた頃、いつも、一度だけすべて刈り倒される。その後で生えてくる草は、同じものでも小さく、細くやさしい。夏の終りから冬にかけて目立つのがカルカヤである。これが一面に生えて紫色の穂を出す秋はとてもいい。この広場の駅寄りにあった運送会社の跡地には、放置自転車の山が雑草に埋もれている。駅前の広場にも自転車を置かないようにと書かれた立て札が、自転車の波に沈みそうになっている。この悲しい風景を見ずにすんだらどんなにいいことだろうかと思う。

七月初めの頃、わたしは母のところへ行こうとして、午後一時ごろ、二条駅前でバスを降りた。信号を待って道を渡ると、駅に電車の入るのが見えたので、大急ぎで走って、切符も買わずに人の間をすり抜けてホームへ出た。乗ろうとすると、後から駅の人が、「急行ですよ」とくり返して叫んだ。立ち止まって見上げると車両が普通のものと違っていた。すごすごと引き返して切符を買い、何となく待ち合い室をぐるっと一回りしてベンチに座った。前のベンチに幼い姉と弟が入ってきて、馴れた様子でさっさと座る。母親が切符を買いに行ったらしい。その様子を眺めながら、長座布団のなくなった白いベンチに目をやると、堅い木の椅子に座ると骨が痛いと主人が言ったのを思い出した。

改札が始まったので、時刻を確かめずにホームへ出てしまったが、わたしの乗るのとは反対の、園部行きの改札だったらしい。人々はほとんど板の階段をギシギシと昇って陸橋を渡り、向かい側のホームへ行ってしまった。

京都駅へ行く電車は、まだ二十分ほども待たなければならない。ホームのベンチには、女子高生が三人、ジュースを飲みながらおしゃべりをしている。仕方なくそのままホームに立っていると、間もなく、圏都行きの電車が入ってきた。その時、改札の方で何か声がしたと思ったら、若い女のひとが、右に四才くらいの女の子の手を引いて、左手で半年くらいかと思われるような赤ん坊を抱き、肩に袋を掛けてホームを走り出した。向かい側の電車に乗ろうというのである。何も持たずに自分だけでもこれは難かしい、とわたしは思った。小さい女の子は手を引かれて、いっしょうけんめいに走った。母親はしっかりと赤ん坊を抱いて、少しも力を弛めることなくどんどん走った。階段に消えて行った親子の姿は、そのあと見ることはできないが、電車は三両しか繋いでいなかったから、運転席からも車掌の位置からも、走っている人が見えただろう。改札の人が合図をしたのかもしれない。車掌は電車から外へ出て、ホームにじっと立っていた。ふつうよりだいぶ長く停車していたように思ったから、親子が乗るのを待っていたのに違いない。ホームの車掌が何度も腕時計を見るのが、わたしから見えた。

それから車掌の吹く笛の音がしてドアが閉まり、電車は静かに出て行った。向かいのホームには誰も残っていなかった。まだ、陸橋の階段を、親子が降りて来はしないかと、しばらくじっと見ていたが、もちろん降りて来る人はなかった。わたしはほっとして、しばらくは感心したまま立っていた。この慌ただしい世の中に、思いがけないものを見た気がする。バスなどは、すぐ近くまで来ている人を待ち切れずに発車してしまう。乗りかけている人を引きずって走り出すバスもある。

わたしは、それから後もだいぶ長く電車を待たなければならなかったけれど、先ほどの光景を思うと、日頃、

待つという行為を忘れかけていることに気がついて、いらいらする気持を、押さえることができた。

二条駅は、華やかな京都の裏にいて、飾らない人々の暮らしぶりを、ほんの少し、のぞかせているようである。

餓鬼たちはうろつき　－法華経巡礼　49－　1990.7.13.　原田憲雄

3-27. このように、その家はおそろしく、大きく高いが、極度に衰え、
老朽し、弱り、ぐらぐらしていて、ひとりの人の持ち物だとしよう。（55）
その人が、家の外側にいると、この住まいが燃え出して、
突然、ぐるっと四方まで、幾千の火にもえあがる。（56）
竹や木材が火に焼け、重い、恐ろしい音をたて、
柱や壁も同様に燃え、夜叉や餓鬼たちは叫びを放つ。（57）
幾百の禿鷹は炎に包まれ、クンバーダ鬼は、顔焼けただらせ、うろつきまわり、
ぐるりいちめん、幾百の猛獣が叫んでいる、身を焼かれて。（58）
多くのピシャーチャ鬼はそこをうろつき、火に焼かれる、不幸にも。
かれらは互いに牙で切り裂き、血まみれになる、焼かれながら。（59）
狼たちはそこで死に、生き物どもはそこで互いにむさぼり食い、

家は滅び、不快な臭気がたちこめる、世界の四方に。（６０）

百足がそろそろ逃げ出せばクンバーダ瓶が倒れつつし

家を焼かして、柱梁たちはうろつきまわる、瓦礫と煙火に囲られながら。（６１）

etādṛśaṃ bhairavu tad gṛhaṃ bhavet mahantam uccaṃ ca sudurbalaṃ ca /

vijarjaraṃ durbalam itvaraṃ ca puruṣasya ekasya parigrahaṃ bhavet ||55||

sa ca bāhyataḥ syāt puruṣo gṛhasya niveśanaṃ tac ca bhavet pradīptam /

sahasā samantena catur-diśaṃ ca jivālā-sahasraiḥ paridīpyamānam ||56||

vaṃśāś ca dārūṇi ca agni-tāpitāḥ karonti śabdaṃ gurukaṃ subhairavam /

pradīpta stambhāś ca tathaiva bhittayo yakṣāś ca pretāś ca mucanti nādam /57||

saṃlūṣitā⟨v:jvālūṣitā⟩ gṛdhra-śatāś ca bhūyaḥ kumbhāṇḍakāḥ ploṣṭa-mukhā bhramanti /

samantato vyāda-śatāś ca tatra nadanti krośanti ca dahyamānāḥ ||58||

piśācakās tatra bahū bhramanti saṃtāpitā agnina manda-puṇyaḥ /

dantehi pāṭitva te ⟨V:ti⟩ anyam-anyaṃ rudhireṇa siñcanti ca dahyamānāḥ ||59||

bheruṇḍakā kāla-gatāś ca tatra khādanti sattvāś ca te⟨V:ti⟩ anyam-anyam /

uccāra dahyati amanojña-gandhaḥ pravāyate loki catur-diśāsu ||60||

śatā-padīyo prapalāyamānāḥ kumbhāṇḍakās tāḥ paribhakṣayanti /

pradīpta-keśāś ca bhramanti pretaḥ kṣudhāya dāhena ca dahyamānāḥ //61//

3-28. こんなに恐ろしい、幾千の火を放っている、その住居を、

この家の持主であるその人が、門のあたりに立って、見ていた。（62）

かれはそこで聞く、じぶんの息子たちがおもちゃ遊びに心を奪われ、

楽しんで遊びふけるのを、何もわからぬ幼い子だから。（63）

聞いて、かれは、そこに急いではいった、じぶんの息子たちを救うために。

じぶんの幼い男の子らが、焼かれて、すぐに死なないように。（64）

かれは告げる、子らに、この家の欠陥を、「おおい、坊や、ここは危険だ、物凄く、

いろいろなものが、ここにはいて、それにこの火だ、危ないことも次々に。（65）

毒蛇や、悪い心の夜叉たちや、クンバーダ鬼や、餓鬼どもがたくさん住んでて、

狼や、犬や、豺の群、また禿鷹が、食べ物をあさっている。（66）

こんな連中がたくさん住んでいて、火事がなくても、このうえもなく恐ろしく、

それだけでさえ危険だのに、ぐるりいちめん火が燃えている」（67）

こんなふうに諭しはされても、がんぜない子どもたちは遊びに夢中で、

呼びかける父を思いもせず、それらの状態を気にもかけない。（68）

そこでその人は考える。いまは、とにかく、子どものことが心配だ。

子どもがいてる、いなくなったら何になろう。火事で死なせてなるものか。（69）

よい方便を、そのことをかれは聞いて。子どもたちはあちらを遊びに夢中になっているが、

いいには、遊びを楽しむ、何のため。子どもらは遊んでいるのに頭かたんだ。（70）

etādṛśaṃ bhairava tan niveśanaṃ jvālā-sahasrair hi viniścaradbhiḥ /

puruṣaś ca so tasya gṛhasya svāmī dvārasmi asthāsi vipaśyamānaḥ ||62||

śṛṇoti cāsau svake⟨V:svaka⟩ atra putrān krīḍāpainaḥ⟨V:krīḍāpanaka⟩ krīḍana-sakta-buddhīn /

ramanti te krīḍanaka-pramattā yathā 'pi bālā avijānamānāḥ ||63||

śrutvā ca so tatra praviṣṭu kṣipraṃ pramocanārthāya tad-ātmajānām /

mā mahya bālā imi sarva-dārakā dahyeyu naśyeyu ca kṣipram eva ||64||

sa bhāṣate teṣam agāra-doṣān duḥkhaṃ idaṃ bhoḥ kula-putra dāruṇam /

vividhāś ca sattveha ayaṃ ca agni mahantikā duḥkha paraṃ-parātu ||65||

āśīviṣā yakṣa suraudra-cittāḥ kumbhāṇḍa-pretā bhavo vasanti /

bheruṇḍakā śvāna-śṛgāla-saṃghā gṛdhrāś ca āhāra gaveṣamānāḥ ||66||

etādṛśātra⟨V:etādṛśāsmin⟩ bahavo vasanti vinā 'pi cāgneḥ paramaṃ subhairavam /

duḥkhaṃ idam kevalam eva-rūpaṃ samantataś cāgnir ayam pradīptaḥ ||67||

te codyamānās tatha bāla-buddhayaḥ kumārakāḥ krīḍanake pramattāḥ /

na cintayante pitaraṃ bhaṇantaṃ na cāpi teṣāṃ manasī-karonti //68//

puruṣaś ca so tatra tadā vicintayet suduḥkhito 'smi iha putra-cintayā /

kiṃ mahya putrehi〈M:vuttehi〉 aputrakasya mā nāma dahyeyur ihāgninā ime //69//

upāya〈M:upāyu〉 so cintayi tasmi kāle lubdhā ime krīḍanakeṣu bālāḥ /

na cātra krīḍā ca ratī ca kā-cid bālāna ho yādṛśu mūḍha-bhāvaḥ //70//

3-29. かれは子どもたちに言った「お聞き、坊やら、いろんな種類の乗物がある。

鹿や、羊や、りっぱな牛がつないであり、高く、大きく、飾ってある。（７１）

それが屋敷の外にあるんだ。走って出て、したいようにしたらいい。

あんたらのため、父さんが作らせた。好きなようにすればいいんだ、一緒に出てきて」（７２）

このような話を聞きつけ、子どもらは元気いっぱい、おおいそぎで、

みんなたちまち走り出て、空き地についた、危ないところをまぬかれて。（７３）

その人は、子らが抜け出てきたのを見て、部落の中央の四つ辻に立ち、

獅子座にすわりこう言った「ああ、みなさん、わたしはやっとやりとげました。（７４）

危ないところに閉じこめられたあわれな息子、この二十人の幼児は愛する実の子。

ものすごく、住むに危険な、恐ろしい家に、かれらはいました、多くの生き物に満ちみちた。（７５）

幾千の炎がいっぱい燃えさかるなか、かれらは遊びに夢中でした。

わたしは、かれらを、いまみな救った。これでわたしも、やっと涅槃、ということです」（７６）

sa tān avocac chṛnuthā kumārakā nānā-vidhā yānaka yā mamāsti /

mṛgair ajair gopa-varais ca yuktā uccā mahantā samaraṃkṛtā ca ||71||

tā bāhyato asya niveśanasya nirdhāvatā tehi karotha kāryam /

yuṣmākam arthe maya kāritāni niryātha tais tuṣṭa-manāḥ sametya ||72||

te yāna etādṛśakā niśāmya ārabdha-vīryās tvaritā hi bhūtvā /

nirdhāvitās tat-kṣaṇam eva sarve ākāśi tiṣṭhanti dukhena muktāḥ ||73||

puruṣaś ca so nirgati(V:nirgata) dṛṣṭva dārakān grāmasya madhye sthitu catvarasmin /

upaviśya siṃhāsani tān uvāca aho aham nirvṛtu adya mārṣāḥ ||74||

ye duḥkha-labdhā mama te tapasvinaḥ putrāḥ priyā orasa viṃśa bālāḥ /

te dāruṇe durga-gṛhe abhūvan bahu-jantu-pūrṇe ca subhairave ca ||75||

ādīptake jvāla-sahasra-pūrṇe ratā ca te krīḍa-ratīṣu āsan /

mayā ca te mocita adya sarve yenāha(V:yenāhu) nirvāṇu samāgato 'dya ||76||

「老い朽ちた大きな家」の偈を読んでよこした、弟原田禹雄の葉書に「譬喩品の家のこの形容は、昔から、金持ちにふさわしくない形容と思いつづけてきました。今の日本人の心‥‥というべきかも知れません」と書いていた。豊かに富んだ家や社会は、表は豪壮でも、内部に、腐敗・醜悪・破滅が進行しているのではなかろうか。